小さな命を大切にするために（第十三回）

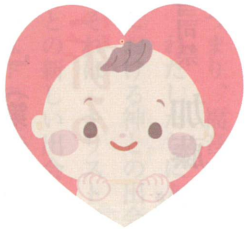
おなかの赤ちゃんのかけがえのない命の為に共に働く

生命尊重センター副代表
聖マリア学院大学学院長
井手 信（のぶ）

三〇数年も前のこと。おんぶ紐で赤ちゃんを背にした若いお母さんと清楚（せいそ）な女性の突然の訪問を受けました。生命尊重活動に協力してほしいとの依頼でした。お二人のあまりの熱心さに、思わず私はカトリックの産科医であり、趣旨には賛同するが、教育の場であるため、特別な宗教の勧誘等ならばお断りしたい、と言葉を返したのでした。当時はある特殊な新興宗教が一部の大学生の中に急速に広まり始めていたのです。ところが、マザー・テレサの来日講演を機に発足した会であるとの設立趣旨を聞き、失礼を詫びて協力を承諾しました。

人工妊娠中絶の現状をほとんど知ることなく私が医科大学を卒業したのは昭和四五年、新宿に高層ビルが建ち始めた頃でした。当時の日本の人工妊娠中絶数をご存じでしょうか。優生保護法のもとに現在の約4.5倍、年間七三万人もの尊い赤ちゃんの命が闇に葬られていることを知りました。さらには、当時のカトリックの信徒の現状についても、ある先生の、全国の中絶率と信徒の中絶率がほとんど変わらないというデーターをもって、信徒の中絶を容認すると意見を述べられたことに私はさらに衝撃を受けたのです。かけがえのない命の支援者でありたいとの思いと現実とのギャップに悩む私を支えて下さったのは、所属教会のM神父様でした。多くの試練があろうとも、そのような現状を知る貴方が産科医を続け胎児の命を守っていくのが、カトリックの医師としての貴方の使命でしょう、祈りなさい、と。生命尊重の会のメンバーの訪問を受けたのはその少し後でした。病院の中だけで働いていた私を地域の、誰からも関心を持たれることのない人々の中へと連れていって下さったのは会のメンバーでした。当時は私たちの支援活動は必ずしも受け入れられず、嬰児殺しにつながると地域の産科医から活動を非難されたメンバーもおりました。また、こんな小さい子を育ててどうする、障害が残ったらだれが面倒を見るのかと、地域の声が聞こえてきました。それでもなお、おなかの赤ちゃんという最も小さい命は尊いのです。私たちは活動を続けました。

数十年が過ぎました。少子化の影響を受け、やっと世の中も少しずつ変わってきています。平成二七年三月「子育て世代包括支援センター」の整備などによる切れ目のない支援体制の構築がうたわれた「少子化社会対策大綱」が閣議決定されました。同じ頃、私たちは地域の母子保健支援体制構築と共に、妊婦の自己決定のもと望まない妊娠のスクリーニングも組織化されようとしていることを知ったのです。行政では、女性の権利は胎児の生きる権利より優先されるのでしょうか。私たちは〝命をつなぐ架け橋〟になってほしい、との思いで県内保健所の母子保健担当保健師さんに呼びかけ、地域を超えてのボランティアのメンバーも集い、いのちの支援者のための勉強会を重ねました。現在、我が国では総合的子育て支援の充実が図られており、特別な配慮が必要な子供、家庭への支援も行われるようになりました。少子化に伴う分娩数の減少に加え、産前産後サポート事業、産後ケア事業が制度化されたこと等もあいまって、地域の産科クリニックでも社会的リスクのある方の出産を積極的に受け入れて下さるようになりました。経済的に困窮し、また、様々な理由により葛藤する妊婦さんがクリニックでの出産を拒否されていた昔を知る私は、時代の変遷を感慨深く思います。



今、コロナウイルス感染蔓延のため人と人のかかわりが減少していますが、一方で、コロナ禍のなかにも、地域の中の、誰からも関心を持たれず葛藤する妊婦さんとおなかの赤ちゃんを訪問し、支援し続けているボランティアの方々がいることを知っていただきたいと思います。宗教を超えておなかの赤ちゃんという小さな命の尊厳を守り、奉仕を続ける人たち。生命尊重センターを支える全国のボランティアの方々のバイタリティと笑顔はとてもステキです。

円ブリオ基金箱の設置を

皆様より善意の1円を頂き、経済的に困窮する妊婦さんに出産費・健診費を支援。国内初のお腹の赤ちゃんの命を守る基金です。家庭・学校・お店などに基金箱を設置頂き、1円を集めて送って下さい。

〈円ブリオ基金・ご寄付送り先〉

【郵便振替】
口座番号　00150-9-415477
加入者名　円ブリオ基金センター

◆NPO法人円ブリオ基金センターでは、**「妊娠SOSほっとライン」**を設置。
フリーダイヤル **0120-70-8852**（ハハコミ）
（火・木 10:00 ～ 16:00）